

《2011年10月例会報告》

【日時】2011年10月16日（日）14:30～16:00（月例会）、16:00～18:00（懇親会）

【会場】cafe FLOWER（横浜市中区山下町24-7シティコート山下公園1階）

【テーマ】サッカーのいちジャンルとしてみるハンディキャップサッカー

－電動車椅子サッカーの今と未来－

【話題提供者】高橋弘（日本電動車椅子サッカー協会会長）

【コーディネーター&報告書作成】依藤正次（NPO法人横浜スポーツコミュニケーションズ＝ヨココム）

【参加者（会員）3名】金子正彦（会社員）、中塚義実（筑波大学附属高校）、依藤正次（ヨココム）

【参加者（未会員）11名＋犬1匹】今井真理子（ヨココム）、小出正三（ヨココム）、落合博（毎日新聞社）、加藤朋子（共同アトリエ）、北沢洋平（日本電動車椅子サッカー協会）、北沢浩之（日本電動車椅子サッカー協会）、小山内明（株式会社マルハン）、重松寛子（株式会社マルハン）、高橋愛（日本電動車椅子サッカー協会）、高橋もへ男（高橋家の犬）、筒井彩樹（日本電動車椅子サッカー協会）、橋口宏樹（立教大学大学院）、吉井勇（株式会社ニューメディア）

サッカーのいちジャンルとしてみる ハンディキャップサッカー －電動車椅子サッカーの今と未来－

話題提供者：高橋弘（日本電動車椅子サッカー協会会長）

コーディネーター：依藤正次（NPO法人横浜スポーツコミュニケーションズ＝ヨココム）

<目次>

第Ⅰ部. プレゼンテーション

1. 電動車椅子サッカーとの出会い
2. 世界の電動車椅子サッカー
3. ワールドカップ開催へ

第Ⅱ部. ディスカッション

1. 電動車椅子のスピードとルール統一をめぐって
2. 各国のプレースタイル
3. パラリンピック正式種目を目指して
4. サッカー協会との関係
5. ワールドカップをめぐって
6. 練習内容と電動車椅子
7. 2011 フランス大会へ向けて

第 I 部 プレゼンテーション

1. 電動車椅子サッカーとの出会い

<高橋弘の場合>

まずは私の自己紹介から、私は 1971 年生まれの 40 歳です、今電動車椅子に乗っているんですけども私の場合は中途障害なんです、交通事故で首の骨を折ってしまい首の中にある脊髄が切れてしまったので首から下が動かなくなって電動車椅子に乗るようになりました。

今から 17 年前、ちょうどアメリカのワールドカップの決勝の 4 日後に交通事故で首の骨を折ってしまいました。怪我をする前は幼稚園の先生をされていて、偶然なんですけどここから歩いて 15 分くらいのところにある幼稚園で働いていました。幼稚園で働きながら通信制の大学で学び幼稚園の先生の資格を取っていました。その後事故にあい入院生活からリハビリをして 1 年半くらい経った時に、今は廃刊になっているんですけど『アクティブジャパン』という障害者のいろんなスポーツを取り上げている雑誌がありまして、そこに電動車椅子サッカーの大会のことが取り上げられていました。

それをみて「これは自分で出来るんじゃないか」ということで直ぐに飛びつきました。

元々健常者のときからスポーツはいろいろ経験しており、ちょうど J リーグが始まる頃はサッカーがブームになっていて草サッカーチームのゴールキーパーとかやっていました。そのときには自分のチームはバルセロナと同じユニフォームを使っていたのですが、そこからバルセロナが大好きになってしまい今はバルセロナのソシオでもあります。

他にいろいろ車椅子のスポーツがあります。例えばマラソンとかテニスとかバスケットとかいろいろあるのですが、自分の場合障害が重く手に握力が一切ありません。それから腕もほとんど動きません。持ち上げる力はあるのですが落とす力がありません。車椅子にただとんと乗っかっているような状態です。また横の肘掛がないとパタンと車椅子から落ちてしまいます。でもこういう保護する道具があるのでバランスが保てている状態です。

そんな状態ですので例えばテニスをやりたいと思ってもラケットが持てませんし、バスケットをやりたいと思ってもボールが持てませんからパスもできません。マラソンをやりたいと思っても車椅子を漕げませんし多少通常の車椅子にも乗れるんですけど、段差が 1 センチくらいあったらもう動かせないという状態ですので電動車椅子に乗る必要があります。

電動車椅子に乗っている人というとなかなかスポーツをする機会がないんですね。自分の場合には脊髄損傷という中途障害なんですけども、電動車椅子サッカーをやっている人の障害は脳性まひの人が 40% くらい筋ジストロフィーの方が 40% くらい、残りのいろんな障害が 20% くらいの割合です。特に脳性まひの方は生まれつきの障害なのでなかなかスポーツをする機会がないんです。小さい頃から体育とか外で運動する時期に運動が出来ない。それから筋ジストロフィーの方だと小学生位から発病して段々動けなくなって車椅子に乗ってさらに車椅子も動かせなくなってから電動車椅子に乗るようになって、ちょうど一番遊びたい盛りのときにスポーツが出来ない。そういう状態なんですけど、そういう人たちにとって唯一できるスポーツが電動車椅子サッカーなんです。

普通の人のように「今日はサッカーやろうとかバスケットやろう」とか選べるのではなくて、重度の障害の人にとっては「これしかない」というスポーツなんです。ですから普通の人と違ってスポーツにのめり込む割合というのがまったく違います。よく元サッカー日本代表の岡田監督が言うんですけど「普通のサッカーのプロの選手よりもプロらしい気持ちとモチベーションがあるのじゃないか」という話をよく聞きます。

私は東京都の府中市に住んでいるのですが、隣の国立市に既存のチームがありまして、その練習に出るようになり、そのうち私の友達にも声を掛けて FINE というチームを結成するようになりました。

FINE を結成したのが 1997 年です、最初は電動車椅子サッカーをやるための電動車椅子を持っていなかったの、病院から電動車椅子を借りてきて、練習の度にその電動車椅子をもって行って練習をしていました。

そのうち仲間と大会にも参加していくようになり、サッカーもどんどん上達していき、2 年後の 1999 年に熊本で開催された第 5 回の日本電動車椅子サッカー選手権大会で見事優勝しまして、私自身も MVP を頂きました。

ただ、日本一になったのですが、その先の世界が電動車椅子サッカーにはまったくなかったんです。日本の中でやっている選手でも世界のことを知っている人はたぶん誰もいなかったと思います。世界で電動車椅子サッカーをやっているという情報もまったくない状態で、日本代表とかワールドカップなど夢のまた夢という、まったく想像も出来ないような時代でした。

そのときにわたしは「サッカーをプレーしている以上、夢としてワールドカップをやりたいな」という気持ちを抱くようになりました。

そこから海外に視点を向けていきました、ワールドカップを開催するには仲間を作らないといけませんので、海外へ出かけて「同じ夢を共有できる人がいないかな」ということを念頭に入れながら、教えに行ったり大会に参加したりといったことをしてきました。

そこでまでが、わたしが電動車椅子サッカーに関わって世界に目を向けるようになったきっかけになります。

それでは北沢選手からも電動車椅子サッカーに出会ったきっかけなどお話しください。

<北沢洋平の場合>

それでは最初に自己紹介から。私は 1984 年生まれの 27 歳です、電動車椅子サッカーとの出会いは、最初は私が通っていた病院で電動車椅子サッカーをやっていて、そのときは親に連れられてという形だったので、そんなに興味もなく、小学 5 年生から始めたのですが、最初はここまでのめりこむような感じではなくて、ただボールを蹴るのが楽しくて、健常者が公園でボールを蹴るような感覚でやっていました。それから高橋会長のいる FINE というチームが私の通っていた養護学校の体育館で練習されていて、その練習に参加しているうちに、もっとサッカーが上手になりたいと思うようになり、また病院のほうも電動車椅子サッカーをやりたい人たちが集まってきて、そこから今所属しているレインボーソルジャーというチームを 1999 年に結成することになりました。そして自分のチームでいろんな大会に参加するようになり、2004 年に横浜で全国大会があったのですが、そこで初優勝して大会の MVP を貰いました、その後ルールの変更などあったのですが、石川県で行われた全国大会でも優勝することができました。

また 4 年前に日本で開催されたワールドカップにも日本代表として参加することができました。その大会では第 4 位という結果で終わってしまいました、今年の第 2 回ワールドカップに日本代表として参加します。4 年前の悔しい思いをしたのでフランスに向けて頑張っていきたいなと思っています。

<質疑応答>

依藤：ここで質問なのですが、FINE 結成時には日本電動車椅子サッカー協会というのは出来ていたのでしょうか

高橋：日本電動車椅子サッカー協会は 1995 年に設立されています、電動車椅子サッカー自体は日本では 1982 年に始まりまして、大阪の障害者スポーツセンターの職員の方が、アメリカとかカナダでパワーサッカーという電動車椅子サッカーとは別のルールのサッカーがあったのですが、そのサッカーのルールを日本流にアレンジしました。そのときはサッカーボールがなかったのでビーチボールのような 1 メートルくらいある大きなボールを電動車椅子で押してプレーするサッカーを始めたの

が最初です。

そこから 10 数年たって日本電動車椅子サッカー連盟という全国組織が立ち上がりました。

中塚：北沢さんは小学 5 年生から病院で始められたそうですけど、それはリハビリのプログラムとして始められたのでしょうか

北沢：親の会というのがその病院にありまして、そこで皆でスキーに行ったりしていました、そのうち電動車椅子サッカーをやってみませんかという話しがでてそれがきっかけになりました

中塚：それはどういうところで？

北沢父：小平にある国立精神・神経センターです、彼は筋ジストロフィーなのですが、当時は筋ジストロフィーの研究所を兼ねたこの病院に筋ジストロフィーの子供達が何人か集まっていた。皆病気のことなどわからないので親の会を作り、そこでリハビリなどしているうちに電動車椅子サッカーをやるようになりました。

最初は本人が、さっき言ったようにあまり興味がなかったのですが、親のほうが一生涯懸命になって、これはリハビリになるのじゃないかと思って活動するようになり、最初はサッカーじゃなくて料理だったりゲームだったりとか冬場にはスキーに行ったりとかあったのですが、たまたま都内で電動車椅子サッカーをやっているチームがありそれがきっかけになりました。

高橋：なかなか電動車椅子というのは、ちっちゃいうちから出会うことがないのです。というのは、障害を持っている人にとって電動車椅子というのは、養護学校の先生やリハビリ関係者にとっては悪いものなのです。楽しんでしまうものとして見られてしまうのです。だから小さいうちから乗せたがらないのです。

依藤：それは今でもそういう傾向はあるのですか？

高橋：あります。

依藤：それは日本独特の考え方なのでしょうか？

高橋：そうですね。例えばアメリカなんかだと幼稚園から小学校に上がって周りの子供たちが自転車に乗るようになると、今まで手動の車椅子で追いついていたのが追いつかなくなっちゃうので、電動の車椅子に乗るようになります。アメリカ製の車椅子は凄く早く、スピードも 16 キロぐらい出ます。それに乗ってその子達と一緒に遊ぶようになります。

なんでも出来ることはやりなさいという感じです。日本とはまったく違う環境ですね。

2. 世界の電動車椅子サッカー

次は海外のことについて話していきたいと思います、私が海外へ目を向けるようになった 1999 年に、カナダにパワーサッカーという別のサッカーがありました。それは日本とほとんど一緒のルールなのですが、スピードが無制限で何キロだしてもかまわないという違いがありました。

そのカナダのパワーサッカーのチームと親善試合をしようというツアーが名古屋の旅行会社からありまして、それに自分は参加しました、そのときのカナダの人たちとの交流が、海外との交流を始め

たきっかけになりました。

翌 2000 年には、いまスカパーなどでサッカーの解説をされている羽中田昌さんとの出会いがありました。羽中田さんはそのころスペインのバルセロナにサッカーの勉強に行っておられ、一時帰国された際に「スペインにあそびにおいでよ」と言われ、「はい行きます」と言ってすぐにスペインへ遊びに行き、そのときにスペインの人たちにも電動車椅子サッカーを教えてきました。

スペインでは電動車椅子サッカーでなくて電動車椅子ホッケーというものが盛んなのです。ヨーロッパのサッカー主要国で電動車椅子サッカーがあるのはイングランドだけなんです。ドイツとイタリアとスペインは電動車椅子サッカーはないんです。なぜかって言うとホッケーが盛んだからなんです。ホッケーというのは手にスティックを持って小さいボールを打つのですが、さっき言ったように、手が動かないと出来ないスポーツです。手が動かない人は車椅子にスティックを着けるんですけど、そうやって動かす人と手で動かす人が一緒にプレーしたらまったくスポーツのレベルが違ってしまいます。そういう事情もあり、ドイツやスペインには電動車椅子サッカーはまったくないんです。それでスペインの人たちにサッカーの楽しさを伝えようとしたのですが、なかなかそのあとが繋がらず、いまだに普及していない状態です。

また FC バルセロナが日本に来たときには、バルセロナの副会長に会い、電動車椅子サッカーのビデオを渡して電動車椅子サッカーを広めようとしたのですが、なかなか上手いかなかったですね。

その翌年の 2001 年に、アメリカの西海外のほうで初めてパワーサッカーの大会が行われました、現在(株)マルハンさんの契約社員として働いている平野誠樹選手がその当時にアメリカのサンディエゴの大学に留学しており、彼が地元のパワーサッカーのチームに参加していましたので、その選手から大会の情報を聞きました、そして「日本からもチームを作って参加しないか」という話になりました。そこで日本から有志でチームを作って参加することになりました。そのときは北沢選手も参加しています。

アメリカのサッカーの大会なのでまったくルールが違うんですね。日本ではその当時、軽自動車のタイヤを半分に切ったバンパーを電動車椅子に紐で取り付けてサッカーをやっていたんですが、アメリカはプラスチック製のまな板のような四角いガードをつけてサッカーをやっていて、ルールもまったく違い、同じなのはバスケットコートでやるのと 4 人でプレーするのとゴールキーパーが一人いることだけで、あとはぜんぜん違うルールなんです。英語とも格闘しながら何回か練習を積んで大会に参加しました。

そうしたところ、なんと初優勝。アメリカのチームをことごとく全部やっつけて優勝してしまいました。

これはアリゾナ州フェニックスでの大会でした。大会で驚いたのは、人工呼吸器をつけた人がプレーしていたのです。自分で呼吸が出来ないので機械をぶら下げてサッカーをしているんですけども、そういう人がチームの中で 3 人もプレーしていたり、日本ではとても考えられないことでした。日本ではお医者さんとか看護婦さんが「危ないから絶対やっちゃだめですよ」と止められるのですが、向こうの人達は「自分がやりたければやりなさい」という考え方です。

試合中にボールが呼吸器の機械にぶつかって止まっちゃったんですけど、するとヘルパーさんが来て、呼吸器の変わりに空気を送る機械を使って対応したりしてプレーを続けていました。日本との違いにびっくりしました。日本だとどうしても障害者を保護する感じで「危ないことは止めよう止めよう」という感じなのですが、すごく文化が違うんだなと思いました。

それから、同じ年なんですけど、今度はイングランドへ行きました。イングランドへ行ったのは、外務省主催のイベントでジャパン 2001 という、イギリス国内における日本文化を紹介するイベントというのがあり、いろんな日本の団体がイギリスへ行って日本の文化を紹介するイベントなのですが、その一環として電動車椅子サッカーを教えに行きました。

イングランドというとサッカーの母国ですが、電動車椅子サッカーは、先ほどお話ししたとおりの

かったんですね。日本が電動車椅子サッカーをイングランドに伝えました。選手は全部で8名行き、イングランドでデモンストレーションを行い、普及に努めました。ただそのころはイングランドでは知名度がなかったもので、参加された方は障害者スポーツ関係者ばかりで、車椅子に乗っている方は一人しか来なかったのですが、そこからイングランドは電動車椅子サッカーが一気にひろまりました。

イングランドはやはりサッカーの文化があり、障害を持っている人もそれぞれ好きなチームがあり、サッカーを観に行っているのですが、「まさか自分がサッカーが出来るようになるとは思わなかった」と思っている人が多く、電動車椅子サッカーは一気に受け入れられました。今では日本を越すチーム数を有しています。

そして驚いたのですが、ボビー・チャールトンが電動車椅子サッカーのプロモーションビデオ等のランドマーク的な存在になっており、イングランドの普及に貢献していました。

翌2002年には、日本にイングランド選抜チームを招き、横浜や長野で親善試合を行いました。そのときはイングランドでは競技規則の英訳だけで電動車椅子サッカーが広まっていたので、来日時に競技の指導や講習を行いました。

その際にイングランドから、日本から誰かコーチに来てくれないかということをおっしゃりまして、私が行くことになり、2003年にイングランドで2ヵ月間指導をしてきました。そのときはアーセナルでも講習会を開きました。当時のアーセナルのチャンピオンズリーグのマッチデイプログラムに電動車椅子サッカーの記事が掲載され、アーセナルのハイバリーのスタジアムの室内練習場で電動車椅子サッカーの講習会を開くことになりました。

アーセナルのハイバリーのスタジアムには、ピッチの1メートルくらい前に車椅子席があり、ベンゲル監督がいる横が車椅子席なので、一番観やすいところで試合を観れました。驚くことにいつも50~60人、車椅子の人が観に来ています。

その時は、小さい子どもから大人まで観に来ていて、その人たちが講習会に参加してくれました。すごく印象的だったのは、小学校1年生くらいの電動車椅子に乗っているちびちゃん、普通電動車椅子サッカーをやるのに足の脛あて（シンガード）なんていらないうえに「お父さんに買ってもらったんだよ」と脛あてをつけてサッカーを楽しんでいました。

もちろん全身アーセナルで固めて（笑）。

それからFA、イングランドサッカー協会へも表敬訪問し、普及委員会等の会議にも出席することができました。今ではイングランドでは、電動車椅子サッカーはFAの組織の一部として入っています。

いま、FAのオフィシャルサイトを見て頂くと、イングランド代表選手と電動車椅子サッカーの代表選手とがウエンプリースタジアムで一緒に写っている写真が掲載されています。

この2ヵ月の滞在中にはアーセナルのホームゲームのチケットを頂き、全部ホームゲームを観戦させていただきました。

イングランドに行って驚いたのは、プレミアリーグのすべてのスタジアムに障害者用のガイドブックがあり、全部のバリアフリーのマップがあって、どこにトイレがあるとか全部載っている分厚い本があったのが驚きました。目の不自由な方は音で楽しめればよいので柱のところに座席があったりして、車椅子だけではなく、聴覚障害者や視覚障害者の人にもゲームを楽しめるようなスタジアム作りをしているのがすごく驚きました。

2004年にはまた、アメリカのインディアナポリスで大会がありまして、そこにはアメリカのチームと日本の有志のチームとイングランド、またその時はじめてフランスでも電動車椅子サッカーをやっている事がわかりましてフランスチームも招待され、世界の人たちを招いた大会が行われました。

見事にそのときも日本のチームが優勝してしまいました。その時にいろんな各国の電動車椅子サッカーの人たちと夜お酒を飲みながら話しをしている際に、「やっぱりサッカーをやるならワールドカップだよ」という話題になり、そのときの懇談から、ワールドカップや世界的な組織を作る機運が生まれて行きました。

3. ワールドカップ開催へ

ワールドカップを開催するにはルールを統一しなければいけませんし、世界組織も作らなければいけません。まず世界組織を作りましょうということで、当時電動車椅子サッカーが行われていた6カ国で世界組織を作ることになりました。

2005年にはフランスで世界初の電動車椅子サッカーの国際会議が開催されました。その時には、日本とアメリカ、カナダ、イングランド、ポルトガル、フランスの6カ国が参加して、世界組織 FIPFA という組織（Federation International Powerchair Football Association）が結成されました。

そこでワールドカップまでのロードマップを作ることになります。その時には世界で4つ、電動車椅子サッカーのルールがありました、日本のルール、アメリカ・カナダのパワーサッカーのルール、イングランドはイングランド独自で日本のルールをアレンジして行われており、またフランスも別のルールで行われていました。

フランスは今になって、世界で初めて電動車椅子サッカーが行われたということがわかりました。1978年からフランスでは電動車椅子サッカーが行われていたのです。

フランスでは金属製のフットガードという電動車椅子サッカーに取り付ける器具があるのですが、これを使い、ボールはバスケットボールを利用してサッカーをやっていました。なぜバスケットボールなのかというと、最初普通のサッカーボールを使っていたらしいのですが、金属のフットガードでサッカーボールを蹴ってしまうとすぐにボールが痛んでしまうのと、車椅子の下にボールが入ってしまうので一番サイズがあって頑丈なバスケットボールを利用していたそうです。

またインドアサッカーとして、タッチライン沿いに壁が斜めに全部つけてありまして、その壁を使ってパスをしたりするサッカーをやっていました。

その4つあるルールを統一するために、2005年の終わりごろ、ポルトガルに8カ国が、前述の6カ国に加えてベルギーとデンマークが集まり、世界の統一ルールを決めるイベントを開催しました。

その時は、世界に4つあるルールを全員が体験してそれを評価するというを毎日、8日間くらい繰り返して、朝から夜まで死にそうになるくらい行いました。昼間はずっとイベントをやって、夜は会議をやって、朝は9時から夜は10時くらいまで会議というのを1週間続け、最終日に、参加した国の投票で世界の統一ルールを作りました。

だいたい元になったのはフランスのルールなのですが、ボールは13インチのものを使用することになりました。当時日本やアメリカは直径50センチくらいある大きなボールを使っていたのですが、フランスではバスケットボールを使っており、それでは中間を取りましょうということになり、ボールの大きさは13インチになりました。

この大きさだと車椅子の下にボールが入ることもないので、このサイズのボールを新たに作りました。最初に作ったメーカーはカナダのスポーテックというところですが、そこに依頼してボールを作り、フットガードは金属製のものを利用し、スピードは10キロに統一しました。その3つだけをその時に決定することになりました。

そこから競技規則を作る委員会を作り、細部を詰め、2006年にアメリカのアトランタで、そのルールを検証するプレワールドカップが開催されました。そこには全部で6カ国が参加し、そのとき日本は6カ国中2位になりました。

ただ、フランスと試合をしたときに8対0くらいで負けたのですが、その原因は、日本では当時大きなサッカーボールを使って時速6キロでプレーしており、ほとんどラグビーのようにボールを押し相手のスペースを潰し、その裏をボールを通していくというスクリーンプレーをするようなサッカーをしていたのです。

フランスは元からパスを回すようなサッカーをやっていたのに対して、私たちがパスを回すという習慣がなかったんですね。またスペースへ動くという習慣もなかったのです。初めてフランスと試合を

したときにショックを受けました。

またスピンキックという、車椅子をグルッと回転させてキックをする技術があるのも初めて体験しました、そんな技術は日本にはないし、やっている選手もいなかったです、そこにフランスの選手が華麗にパスをまわして、普通のフランスのシャンパンサッカーのようにバンバンパスを繋いでシュートを決めるということをやっている様子を見て、それでカルチャーショックを日本の選手は受けました。

これはすごく面白いサッカーになるということで、日本でもそこから競技規則に合ったフットガードを製作したりして、翌年 2007 年に開催された第 1 回ワールドカップに臨みました。

2007 年には東京で第 1 回のワールドカップを開催したのですが、なぜ日本で開催したかという点、そういったイベントを持ち回りする順番で日本にまわって来たという経緯もあるのですが、どうしても自分としては、世界のどこかの国でワールドカップが開催されてしまうと日本にいるプレーしている人達がまったく見れない状態になってしまいます。世界のサッカーを日本でプレーしている人たちに見せなければいけないという強い思いで、日本へワールドカップを誘致しました。

いろいろと開催に際して努力をつづけ、一時は開催が危ぶまれたときもあったのですが、なんとかマルハンさんの協力を頂き、無事に開催できることになりました。

第 1 回ワールドカップは、日本に 7 カ国（日本、アメリカ、イングランド、フランス、ポルトガル、デンマーク、ベルギー）が参加して開催され、日本は残念ながら 4 位という結果に終わりました。

この 4 位という結果も、日本は先ほど言ったように、統ルールへの対応が他の国から較べて日本が一番不利な状況だったんですね。アメリカやカナダはスピードの制限なしにプレーしていたので、逆にスピードは遅くなってしまいうんです。日本は 6 キロから 10 キロに上がるんで、みんな怖い怖いといっている状態で、なかなか競技に立ち向かえないですし、またフットガードも、今まではゴムのタイヤを使っていたのでボールが弾まないのですが、ボールが弾む金属製に変更になりました。

ですから今までとまったく違う状況に対応しなければなりません。当時は競技規則を読んだだけで各自がそれに合ったものを勝手に作るという形で、何もベースがないまま競技用具を作って日本代表の選考を行ったといった状態でした。

まったく未知のものを未知のまま進めて大会に参加した状況でしたので、そういういった結果になってしまったのですが、今回の第 2 回ワールドカップに参加する選手達は、そういったことは全部クリアしており、競技の戦術とか深いところまで電動車椅子サッカーを理解して大会に臨む体制になっていますので、今回のワールドカップはかなり期待できるんじゃないかと思っています。私が思うに、世界で実力的には一番強いんじゃないかなと思います。

2007 年のワールドカップの後には世界の他の地域にも電動車椅子サッカーを広める活動を行い、2010 年にはシンガポールでクリニックを行いました。また今年の 8 月にはオーストラリアへ行き、オーストラリアは初めて第 1 回の選手権大会が開催され、オーストラリアは今回のワールドカップへも参加することになりました。

以上が世界的な流れになります。北沢君もなにかありますか？

北沢：自分も高橋さんと一緒に海外へ遠征したのですが、自分はその経験があったので、2007 年のワールドカップは結果 4 位でしたけど、自分なりのプレーはできたのかもしれない、第 2 回のワールドカップでは世界一が狙えると思っています。チームが団結して戦えば優勝も夢ではないので頑張りたいと思います。

第Ⅱ部 ディスカッション

1. 電動車椅子のスピードとルール統一をめぐる

落合：いま、スピードが無制限をおっしゃられて、日本は6キロだったけどいまは10キロだと。それはどうやって判定するものなのでしょうか？

北沢：10キロを測るためにスピードテストというものが行われます。15メートルの距離を5.5秒以上でクリアすればOKとなります。それより早い5.4秒とか5.3秒だともう一度測り直して、という形で、秒数で速度を毎回試合前に計ります。それでOKが出れば試合に出場できるということになります。

落合：それは車椅子の性能ということですか？

北沢：速度です。10キロという速度を計ります。

落合：10キロしか出せない車椅子を使うということですね。

高橋：いえ。電動車椅子を10キロの速度に設定するんです、電動車椅子はコンピューターでプログラムが出来るのでその設定をします。実際には審判がストップウォッチを持って、用意ドンで15メートルの距離をスタートラインからゴールラインまで5.5秒以上掛かれば時速10キロ以下になるのでそれをチェックします。また試合が終わった後も、ドーピングのように抜き打ちで、何名かチェックをします。

落合：スピードは無制限の場合と6キロとか10キロとか制限がある場合では、サッカーの質やゲーム内容がまったく違ってしまうものなのでしょうか？

高橋：まったく違いますね。6キロでやるとボールがコロコロ転がっていくと電動車椅子で追いつけないんです。でも10キロだと、電動車椅子の緩急をつけてゆっくり走らせたり早く走ったり、ボールを止めたり。よくブラジルの選手がボールを止めたりして遊んだりしますよね。ああいうプレーも出来ますし、いろんなプレーができるようになるんです。

北沢：よりサッカーに近づいたような、裏を取って走りこんでシュートしたりできるようになって、すごくプレーの幅ができたように思います。

高橋：6キロだとすごくゆっくりゲームを見れるのですが、10キロだとスピーディにゲームが展開して、普通のフットサルくらいのスピードに近づきますね。

中塚：ルールの話はすごく面白いなと思って聞いていたのですが、それはサッカーのルールが統一されていく過程とすごく似ているように感じました、そもそもルールが統一される以前に、それぞれの国でぜんぜん違うやりかたでやっていたわけですよね、そもそも何が違うのでしょうか？

高橋：まず国の法律が違います、日本だと電動車椅子は歩行者に分類されるんですね、歩行者という

のは6キロしか出しちゃいけないんです。なので日本国内で電動車椅子は時速6キロしか出せません。

中塚：すると6キロより早く歩いている大阪人は違反ですね（笑）。

高橋：レッドカードです（笑）。代表選手とか競技志向の高い選手は、日本製の電動車椅子には乗らないんです。自分が乗っている車椅子もアメリカ製なんです。日本の電動車椅子と海外の電動車椅子を較べると、軽自動車とGTRくらいの差があるんですよ。日本の電動車椅子はレバーを動かしてカチッ、ウィーンという感じで動き出すのですが、アメリカの電動車椅子はサッサッサーと自分の思うように動かすことが出来るのです。コンピューターのプログラミングで加速ブレーキとか旋回やトップスピード、バックのスピードとかそういったものを全部コンピューターでプログラムできます。

落合：それはご自分でプログラミングされるわけですか？

高橋：そうです、プログラムする機械を持参していますのでお見せします。最近の電動車椅子はUSBでパソコンと繋いでパソコンでプログラミングできます。

依藤：車椅子自体のレギュレーションなどあるのですか？

高橋：今のところ電動車椅子自体は、市販されているものであればどれもよいという状態です。

依藤：イングランドでは6輪の電動車椅子を使っていますよね。

2. 各国のプレイスタイル

高橋：ほんとうに面白いのですが、電動車椅子サッカーでもその国にお国柄というのが出るんですね。イングランドはガンガンタックルしてくるんです。タックルが大好きで、競技用具もタックルしやすいように、フットガードの周りにゴムを取り付けてタックルし易いようにしてあるんです。それで6輪の電動車椅子で、真ん中が駆動輪で前後のキャストが付いているタイヤで小回りがすごく利く車椅子なんですね。

前の第1回のワールドカップでもガンガンぶつけられて、みんなへろへろになってしまい、「しょうがないからお前行け」と言われて、私が一番体が頑丈なのでぶつけられてもぜんぜんびくともしないので「高橋行け！」って言われてしまいました（笑）。

北沢：イングランドは練習のときからタックルの練習をしてましたもの。

落合：タックルってどういうことをするの？

高橋：車椅子で当たるんです。ボールを持っているプレーヤーに対してガンと当たるんです。

中塚：タックルが強い選手というのは、体重が重い選手と一緒になのですか？

高橋：そうですね。重心が低かったり体重が重かったりとか。それからフランスだと、さっき言った

ようにシャンパンサッカーなので、パスを回して行って調子に乗ってくると『オーレ、オーレ』とか叫んでパスを回しだしますよ。

落合：各国が器具の面で技術改良とか進めてくると、そのうちやはり公平感を出す為に、さきほどおっしゃられたようにレギュレーションの問題とか出てくるでしょうね。

高橋：これから問題が出ればそれに対処するような形になるのかなと思います。

落合：10キロしか出ない車と100キロ出る車が一緒に競技はするのはいかがという話になってくると思うんですね、いずれは。先ほど、試合後に車の速度をもう一度チェックするという話があったのですが、例えば健常者だとドーピングテストってありますよね。本当の意味での禁止薬物ですね。そういったテストもあるんですか？

3. パラリンピック正式種目を目指して

高橋：そうです。今回のワールドカップから、パラリンピックの競技種目に採用されることを我々は目指しており、今回からドーピングが入ります。いま、アンチドーピングなどの資料を提出しています。障害の重い選手は禁止薬物を使ってしまう場合もあり、その申請をする必要もあります。それを飲まない生きていけない選手も一杯いますから。

それから、今回のワールドカップからクラス分けも導入されます。例えば車椅子バスケットでは、障害の重さによって一人一人点数が付けられ、コート内にはその点数の合計が14点までしか出場できないなどの制限があります。電動車椅子サッカーの場合には二つのレベル、障害の軽い人と重い人に分けます、それは、首の可動域とか筋肉のレベル、ボールの操作レベルとかいろんなものを総合的に判断して、医療関係の人たちが一人の選手を20分から30分くらいかけて判断します。

そしてもうひとつ、障害が軽すぎる選手です。電動車椅子サッカーをするに値しない障害が軽い人、そういう人は除外されてしまって試合に出場できなくなります。他の障害者スポーツ、テニスとかバスケットとかができるようなレベルの人たちは、電動車椅子サッカーをプレーするには該当しないということになり、対象外という判断がなされます。

これは国際大会のみですので、国内の大会ではそういう人たちも参加できるのですが、国際大会には参加が出来ないということになります。

そして、ひとつのコートの中に1チームは、障害の軽いレベルの選手は2名までしか出れないことになります。

なんでこういうクラス分けが必要になるかというと、電動車椅子サッカーをプレーしている選手には障害のレベルがいろいろあります、なかには、先ほど言ったように人工呼吸器をつけている人がいたり、杖を付けば歩けるのだけど普通のサッカーやスポーツが出来ないから電動車椅子サッカーをやっていたり、いろんな人がいるので、そういったいろんな人がプレーできるようにクラス分けというシステムが導入されます。これもパラリンピックの種目に採用されるには必須条件でして、ドーピングとクラス分けがないとパラリンピックの正式種目に採用されることはありません。その為に準備をして、今回のワールドカップから適用することになりました。

落合：そういった競技の高度化の過程のなかで、障害の軽い人を、言葉は悪いですが除外していくということは、参加者の多様性を損なうことに繋がらないでしょうか？

高橋：障害の軽い人は他にできるスポーツがあるわけですね。でも電動車椅子サッカーしか出来ない

人が、障害の軽い人の存在によってプレーできないことになってしまう可能性が出てきます。そのほうを重んじるわけです。

今井：普通のサッカーには外国人枠があります。ラグビーでは外国人が一杯入っていますが、電動車椅子サッカーにはそういった国籍条項はありますか？

高橋：国籍についてはその国の国籍を持っている人しかその国の代表にはなれません

高橋：いまパラリンピックの話が出たんですけど、パラリンピックの正式種目になるための申請というものを去年行いまして、2016年ブラジルで行われるパラリンピックの競技種目に申請しました。結果は落ちてしまったのですが、それでは何が足りないかというところ、世界の3ゾーンで競技が行われていること。例えばアメリカとかアジアとかヨーロッパやアフリカという形で、3ゾーン以上で行われていることが条件になります。それはアメリカとアジアとヨーロッパで行われているのでクリアしています。さらに18カ国以上で競技が行われていないといけないのですが、そこが今回クリア出来なかったんです。いま登録している国は全部で14カ国くらいです。今回ワールドカップに参加する10カ国の他にブラジル、シンガポール、ポーランドなどが登録していますが、まだちょっと不足しています。その結果まだ世界的に根付いていないということで、パラリンピックの正式種目にはなっていません。

ただ、パラリンピックとは別に、今回のワールドカップはFIFAが支援しており、今回5万ユーロくらい大会の支援をしてくれるような話を聞いています。それから今回のワールドカップの抽選会にはUEFA（ヨーロッパサッカー連盟）会長のミッシェル・プラティニ氏が来場され、抽選を行いました。FIPFAは正式なFIFAのメンバーに入っていないのですが、普通のサッカーのほうからもだんだん歩みよっているような形になっています。

4. サッカー協会との関係

小出：日本の場合は日本サッカー協会へは加盟しているのですか？

高橋：日本サッカー協会とはまったく無関係です。そこはすごくネックになっており、今回の日本代表もほかのハンディキャップサッカー、例えば知的サッカーや聴覚サッカーやブラインドサッカーも全部そうなのですが、同じ代表のユニフォームを着れない状況にあります。日本サッカー協会に属していない組織なので、A代表と同じユニフォームを着れないのです。

ただ他の国には、その国のサッカー協会に属している国もあります、先ほどのイングランドのようになります。それはその国の法律が関係しているんですね。障害者を差別してはいけない法律があり、アメリカではADA法などあるのですが、イングランドも同様な法律があります。そういった法律を持っている国は、障害者のスポーツも同じものとして扱われて、同じ代表ユニフォームを着ることが出来ます。そういった法律を持っていない国では努力法とかそういったものになってしまい、強制力もないので同じサッカー協会に入っていない場合が多いです。

ただ、そこまでの関係を持っていないということが一番の問題だと思います。なぜ日本サッカー協会が障害者のサッカーと歩み寄りがないのかというと、障害者のサッカー団体はそれぞれ独自に活動しており、電動車椅子サッカーは電動車椅子サッカーの運営だけで、他の障害者サッカーとの連携がなかったのです。最近ではそれではいけないということで、知的障害者、聴覚障害者、視覚障害者、脳性まひ、電動車椅子サッカーで障害者サッカーのネットワークを作り、いまは年に2回ぐらい会議を開いて、お互いの情報交換したり横のネットワークを作っているところです。

そういった障害者のサッカーをひとくくりにして、そういった団体が協会と交渉していくのがいいのではないかと考えています、そこからなにかが生まれてくるんじゃないかと思います。

中塚：よく聞くのが管轄省庁の違いです。障害者スポーツは厚生労働省で、競技団体のほうは文部科学省。その壁を乗り越えないと日本サッカー協会に入ってこれないんじゃないかということですが。

高橋：こんどスポーツ省の創設もありますし、オリンピックとパラリンピックが統合されるという流れもあり、そうなりますとなにかいい動きがあるのかもしれないですね。

依藤：それから電動車椅子サッカーも含めてハンディキャップサッカーは、一般のサッカーファンへの認知度も広げていかないと難しいのかもしれないですね。

高橋：そうですね、電動車椅子サッカーも車椅子バスケットくらいにメジャーにならないと難しいんじゃないかと思います。

小出：電動車椅子をF1みたいに派手に飾りつけたりしてPRしてみたら？

高橋：アメリカの選手は車椅子を国旗のカラーにペイントしたりしてますよ。

5. ワールドカップをめぐる

依藤：今回のワールドカップは各地域の予選はないのですか？

高橋：まだ予選をするほどの参加国はないのですが、大会規定上は16カ国までは予選なしで出場できることになっています。

依藤：第3回のワールドカップではアジア・オセアニア地区で予選があるのかもしれないですね。

高橋：そうですね。アジア・オセアニアゾーンでは日本とシンガポールとオーストラリア3カ国が加盟していて、他に韓国があるのですが、韓国は2005年に日本で親善試合もあったのですが、その後が音信不通というか、まだ国内組織を作るまでのパワーがないという状況で、世界の舞台にはなかなか出て来れないという状況です、ですからこれからアジアの中での普及活動をしていかないといけないと思っています。

8月にはオーストラリアで、アジア・オセアニアゾーンの会議がありました。今まではわたしが会長だったのですが、今度はシンガポールの方が会長になりました。シンガポールは周りの国とのネットワークが良く、タイとかマレーシアとかインドネシアなどすごくコミュニケーションが取れているので、それらの国への普及ということが課題となってきます。今後は東南アジアが中心になってくるのかなと思います。

依藤：まだ第3回のワールドカップの開催地は決まっていないのですか？

高橋：決まっていないのですが、内規がありまして、同じゾーンでは続けて開催できないので、ヨーロッパはまずないです。他のゾーンではアジアかアメリカとなります。そうすると、アジアは一回開催していますので、次はアメリカになるんじゃないかと予想されます。今回もワールドカップの

誘致活動があり、最終的にフランスかアメリカが立候補し、その2カ国を対象に役員で投票してフランスに決まりました。

どうしても加盟国の過半数はヨーロッパですので、投票するとヨーロッパの国に決まりやすいのでフランスに決まったのかなと思います。

日本はアメリカ最良なのでアメリカにしたんですけど（笑）。

6. 練習内容と電動車椅子

小出：北沢選手、今回の日本代表の練習内容を具体的に教えてくださいませんか？

北沢：今回は選手主体でトレーニングする機会が多いです、それはワールドカップに備えてのパスなど連携プレーの練習であったり、選手が自主的に考えてトレーニングしています。なかなかコーチが練習に参加する機会が持てないので、その分を選手主体で練習方法も考えて行っています。

高橋：電動車椅子サッカーの場合、指導者の資格がまだないんです。そこが一番のネックになっています。電動車椅子サッカーの指導者は普通のサッカーを知っているだけでもいけないし、障害者のことも両方を知っていないと指導ができません。障害の軽い人から重い人までいろんな選手がいますし、代表を目指せるレベルの人から電動車椅子を動かせるのが精一杯の人たちまで参加してやっているのです、その人たちに合わせたプログラムを組む必要もあります。

うちのチームですと、バドミントンのコートを利用してテニスのようなことをやってみたり、あとは鬼ごっこをやったり、車椅子を動かす練習としてボールを周りから転がしてそれに当たらないように逃げる遊びとか楽しんだ後に、シュート練習やドリブルの練習などまじめなほうをやったりしています。

これからの課題ですが、指導者の資格を確立しないと今後の普及に繋がっていかないのかなと感じています。

中塚：普段生活に使われている電動車椅子に器具を付けるのですか、それとも競技するときには競技用の電動車椅子に乗り換えるのですか？

北沢：選手によって違うのですが、自分の場合は生活用と競技用は分けて使っています。

高橋：競技レベルや意識の差だと思います。金銭的な問題もあります。自分の場合は電動車椅子が家に5台あります。普通の人の感覚で言えば靴なんです。それはスリッパであったりスニーカーであったり、競技用は自分の場合ではスパイクなんです。

そういう風に競技用と分けて使っている人もいますし、普段の車椅子に器具を取り付けられるようにしている人もいます、自分の場合でいうと、車のフルバケットシートのように体を折りたたんでなるべく小さく低く窮屈で乗るようにしないとサッカーのとき体が振られてしまうので、モータースポーツのような面があります。そうすると普段は疲れてしまうので、家では王様の椅子のようなでっかい車椅子でラクに生活しています。

落合：値段はどれくらい掛かるのでしょうか？

高橋：だいたい普通の国産の車椅子は40万円くらい。海外製は100万円くらいからします。日本の電動車椅子が国から交付されるんですけども、その交付の金額が40万円くらいなんです。ですから

電動車椅子のメーカーもそれくらいのコストで製作しています。そうするとそれなりの性能のものしかできない。アメリカではお金を出せばいくらでもいいものが出来ます。コンピューターやバッテリーもいい物を使ったり。

中塚：40万円の車椅子が無償提供されるんですか？

高橋：障害の判定がありまして、国のほうから「あなたには電動車椅子が必要です」と認められるとその交付券がもらえて、業者から電動車椅子が買えるということになります、もっといいものがほしい人は、自分でお金をだして購入します、電動車椅子サッカーはサッカーでもあるんですが、モータースポーツでもあるんです。モーターが良くないと競技ができない側面があります。トヨタなども電動車椅子を製作しているのですが、それはおじいちゃんとかかが乗るようなものなので、競技に耐えられるようなものではなく、生活をし易くするような方向なんですね。競技用の電動車椅子では需要と供給の差がありニーズが少ないので、開発とか難しい面があります。

7. 2011 フランス大会へ向けて

依藤：今度のフランスの世界カップはテレビ放送などあるのですか？

高橋：開幕戦はテレビで生放送されると聞いています。

依藤：インターネットでの中継は？

高橋：今のところ計画は聞いていないので、現地からのメールを誰かにアップしてもらったりツイッターでの情報が一番早いのかなと思います。

依藤：予選の初戦がライバルのアメリカということで大切な試合になりますね。

高橋：前回大会の優勝チームがアメリカなんです。そこいきなりグループラウンドで対戦します。その勝ち負けでどこがグループ1位になるのか決まると思います。初戦からいきなりがつつりいれないといけません。

依藤：それでは最後に北沢選手、大会へ向けての抱負をお願いします。

北沢：最初にも言いましたが、前回のワールドカップが第4位だったので、その悔しさを今回のワールドカップにぶつけて人生を掛けて頑張っていこうと思います。一生懸命頑張ってきますので応援よろしくをお願いします！（拍手）

中塚：今日は知らなかった電動車椅子サッカーの話をお聞きすることができて大変勉強になりました。僕等も自分達のネットワークで協力していきたいと思います。ワールドカップ是非頑張ってください応援しています（拍手）

（引き続き懇親会）